

トピック
Cスポーツライフ・データからみた
子ども・青少年の運動・スポーツ環境の課題

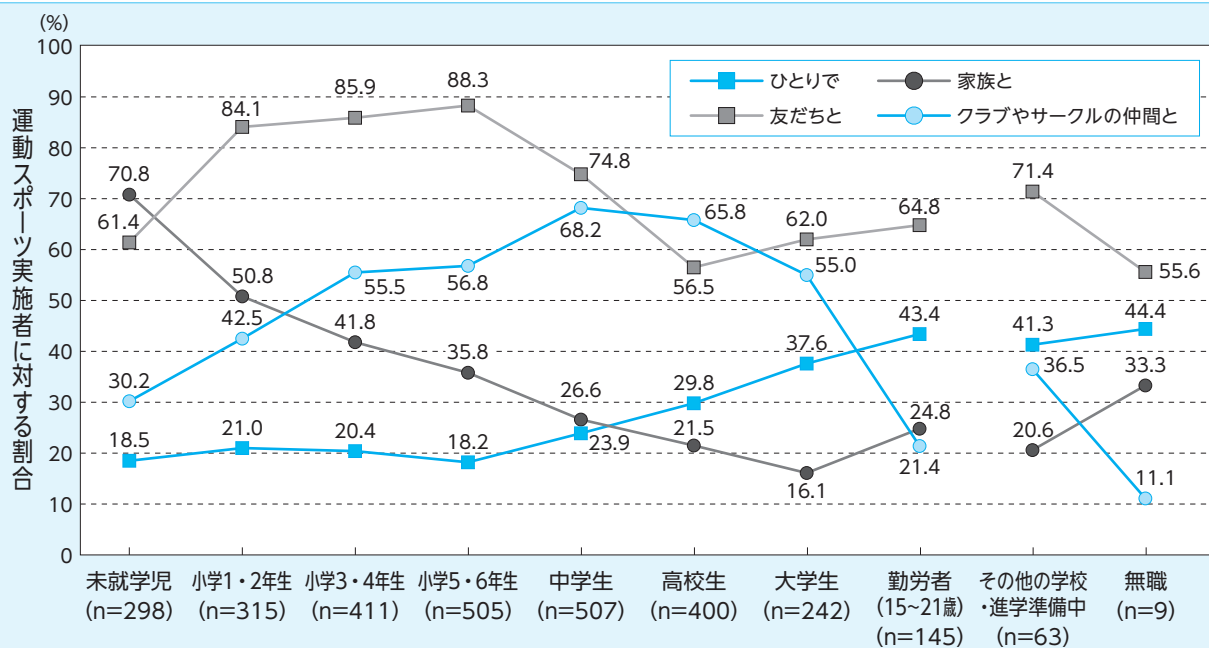
明治大学 商学部 准教授 澤井 和彦

本稿では「4～11歳のスポーツライフに関する調査2017」および「12～21歳のスポーツライフに関する調査2017」の問3「この1年間に行った運動・スポーツの上位5種目」のサブクエスション「オ. その運動・スポーツは主にだれとしているか」「カ. その運動・スポーツを主にしている場所はどこか」「キ. その運動・スポーツをするときにコーチや監督など専門の指導者がいるか」を取り上げて就学・就業状況ごとに集計し、子ども・青少年の運動・スポーツ環境の現況に迫った。

C-1 運動・スポーツは誰としているか(運動・スポーツ同伴者)

運動・スポーツを年1回以上行った者を取り出し、その運動・スポーツを誰としているのか、就学・就業状況別に分析した(図C-1)。選択肢「ひとりで」「家族と」「友だちと」「クラブやサークルの仲間と」の4項目それぞれに

ついて、各回答者が上位5種目のなかで1種目でも回答した場合を有効とした。就学・就業状況は「未就学児」「小学1・2年生」「小学3・4年生」「小学5・6年生」「中学生」「高校生」「大学生」「勤労者」「その他の学校・進



【図C-1】 就学・就業状況別にみた運動・スポーツ実施における同伴者

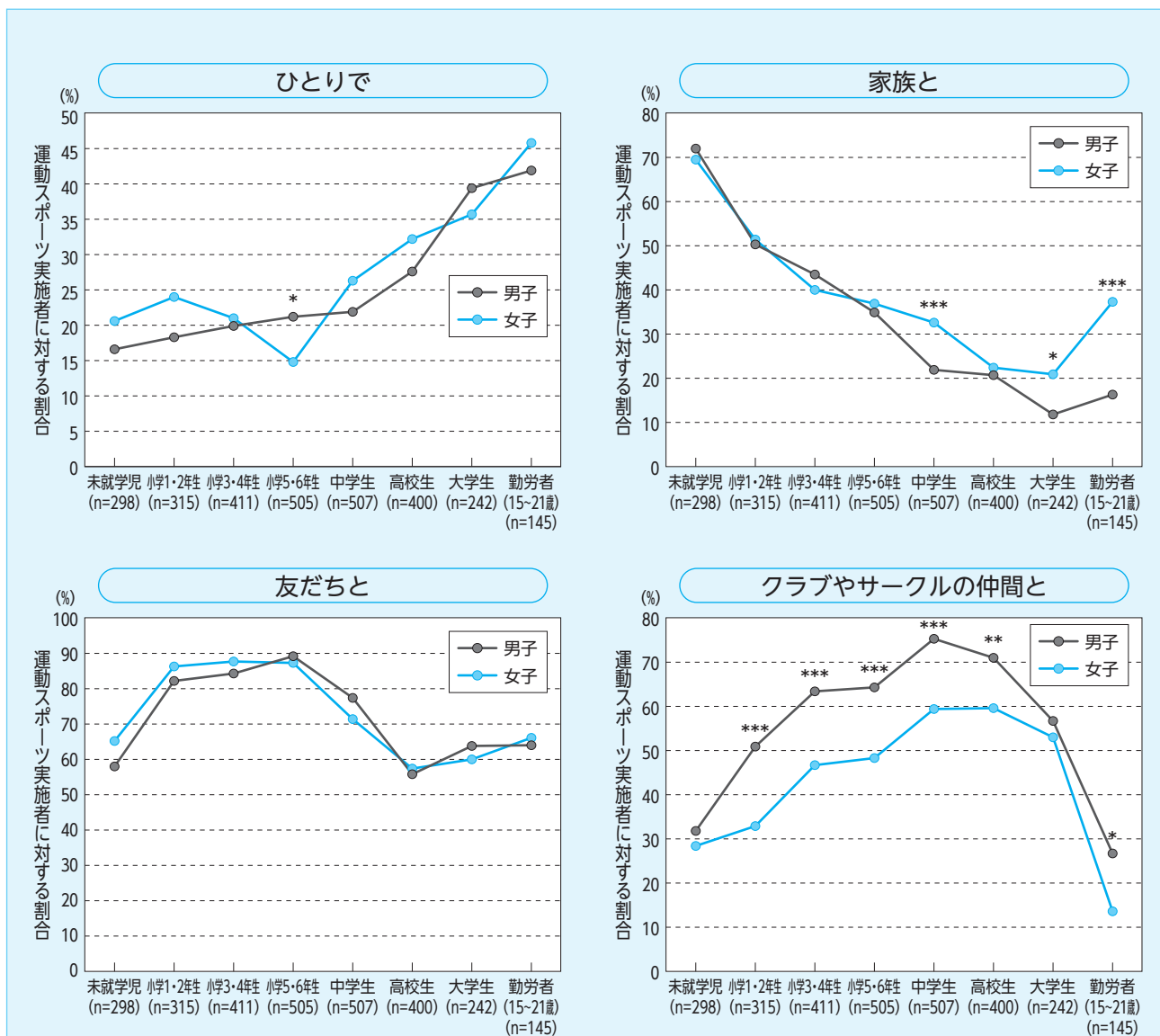
資料: 笹川スポーツ財団「4～11歳のスポーツライフに関する調査」2017、「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2017

学準備中」「無職」の10種類とした。

「ひとりで」運動・スポーツを行う者の割合は未就学児～小学生の間は20%前後で推移するが、中学生から大学生にかけて加齢とともに増加し、勤労者では43%に達する。この増加とは逆に「家族と」は年齢とともに減少するが、勤労者で若干増加する。「友だちと」は小学生時代にもっとも高く、中学生から高校生にかけて大きく減少し、大学生と勤労者において再び増加に転じる。中学生・高校生で「友だちと」が減少するのは運動部活動加入者が多くなり、「クラブやサークルの仲間と」が増えるからで

あろう。しかし、勤労者になると「クラブやサークルの仲間と」は激減し、中学生の3分の1に減少する。

次に、運動・スポーツの同伴者を男女別にみたのが図C-2である。「ひとりで」あるいは「友だちと」には性差はあまりみられない。「家族と」は中学生と大学生、勤労者で女子の方が有意に高かった(中学生; $p < 0.01$ 、大学生; $p < 0.1$ 、勤労者; $p < 0.01$)。また「クラブやサークルの仲間と」は、未就学児と大学生を除き、ほとんどの就学・就業状況において男子の方が高かった(小学生～中学生; $p < 0.01$ 、高校生; $p < 0.05$ 、勤労者; $p < 0.1$)。



【図C-2】 就学・就業状況別にみた運動・スポーツ実施における同伴者(性別)

注) 統計処理には χ^2 検定を用いた。*: $p < 0.1$ 、**: $p < 0.05$ 、***: $p < 0.01$

資料: 笹川スポーツ財団「4~11歳のスポーツライフに関する調査」2017、「12~21歳のスポーツライフに関する調査」2017

運動・スポーツはどこでしているのか、本調査で回答者は問3「カ. その運動・スポーツを主にしている場所はどこですか」として、「1. 自分や友だちの家」「2. 公園や広場・空き地」「3. 学校(4~11歳の調査では『学校や保育園・幼稚園』)」「4. (学校以外の) 体育館やグラウンド」「5. その他[具体的に]」の選択肢の中から1つを選択する。なお、「5. その他」で具体的に記入した内容にはかなりのバリエーションがあり、本稿ではそれらを8種類に分類して再コーディングした(表C-1)。ただし分類項目7、8についてはサンプル数が少ないため、本分析では除外した。

これらの運動・スポーツの実施場所の割合について、就学・就業状況ごとに示したのが図C-3である。図C-1と同様、各回答者が上位5種目のなかで1種目でも回答した場合は有効とした。「自分や友だちの家」と「公園や広場・空き地、河川敷・土手」での実施率は加齢とともに

に直線的に減少している。ただし、前者は勤労者でやや増加する。「学校や保育園・幼稚園」は未就学児から中学生まで直線的に増加し、高校生まで70%以上の高い割合を維持するが、大学生で急落し、勤労者では14.5%にまで激減する。「(学校以外の) 体育館やグラウンドなどのスポーツ施設」(以下、「(学校以外の) スポーツ施設」)は小学3・4年生まで増加するが、中学生以降は高校生まで減少、大学生や勤労者で増加と、「学校や保育園・幼稚園」利用とは逆の動きをみせる。「道路、町内・市内・地域、自分や友だちの家の周り」と「海・海岸・港・湖・池・沼・山・高原」のいずれも公共スペースの利用率は加齢とともに増加する。

次に、運動・スポーツ実施場所について男女別にみたものが図C-4である。「公園や広場・空き地、河川敷・土手」「道路、町内・市内・地域、自分や友だちの家の

【表C-1】 運動・スポーツ実施場所の分類

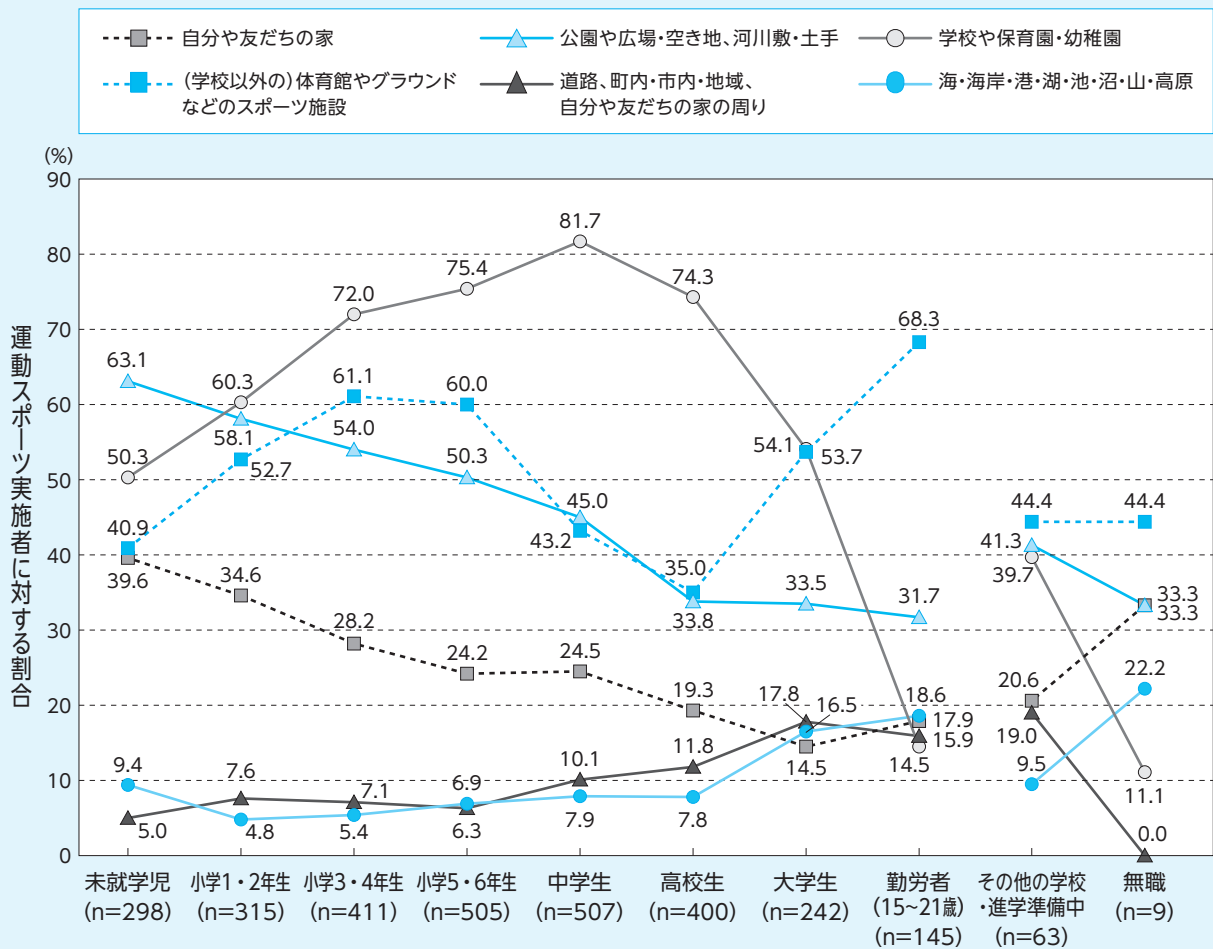
分類
1. 自分や友だちの家
2. 公園や広場・空き地、河川敷・土手(身の回りのクローズドな公共スペース)
3. 学校や保育園・幼稚園
4. (学校以外の) 体育館やグラウンドなどのスポーツ施設 問3カ[5. その他]: プール、スイミングスクール(スイミングクラブ)、スキー場、ボウリング場、スポーツクラブ(フィットネスクラブ・少年団を含む)、トレーニングセンター・ジム、キャンプ場、スケート場、スポーツセンター、テニスコート、バレエ教室、ダンススタジオ、武道場、ダンス教室・ダンスクラブ、ゴルフ場・ゴルフ練習場、テニスクラブ(テニス教室)、剣道・空手・合気道・柔道教室、体操教室、卓球場、ボルダリングジム、アスレチック場、釣堀、フットサルコート、競技場・陸上競技場、乗馬クラブ、バッティングセンター、野球場、サッカー教室、パークゴルフ場、その他のコート、サーキット場、サバイバルゲームの施設、ディスクゴルフ場、ビリヤード場、スケートボード場、屋内遊具施設、リトミック教室を含む。
5. 道路、町内・市内・地域、自分や友だちの家の周り(身の回りのオープンな公共スペース)
6. 海・海岸・港・湖・池・沼・山・高原(少し離れたところにある公共スペース)
7. 公民館・コミュニティセンター・福祉会館・児童館・児童センター・学童・障害者支援施設(スポーツ施設以外の公共施設)
8. その他(1~7に分類されない実施場所) 問3カ[5. その他]: アミューズメント施設、旅行先、職場、ショッピングモール、駐車場、ホテル・旅館、駅、塾、警察、カルチャースクール、リハビリセンター、心理臨床センター、その他を含む。

澤井(2017)

周り」「海・海岸・港・湖・池・沼・山・高原」といった公共スペースの利用率には性差はほとんどみられないが、「学校や保育園・幼稚園」や「(学校以外の)スポーツ施設」は、特に小学生から中学生の年代で男子の利用率が高くなる傾向がみられる。また「自分や友だちの家」は、就学・就業状況に関わらず一貫して女子の方がかなり高い。これらはもちろん実施する種目の性差とも関係している。

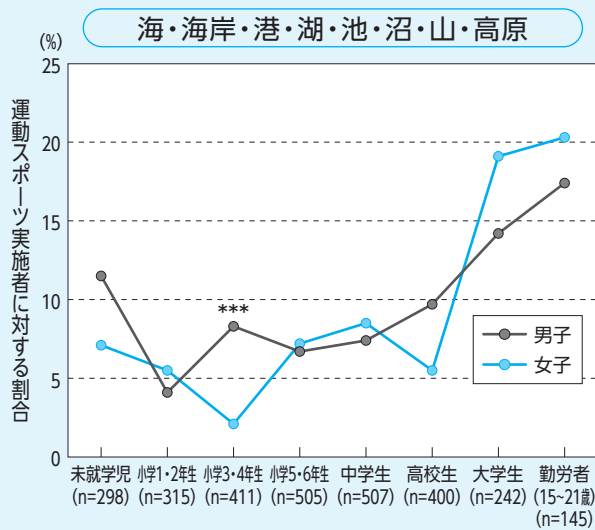
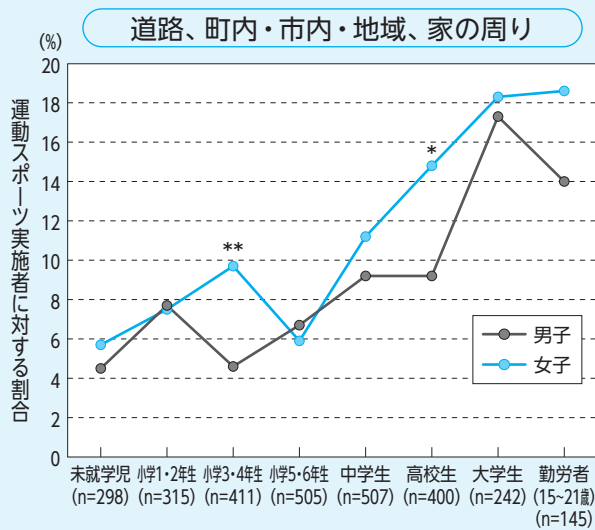
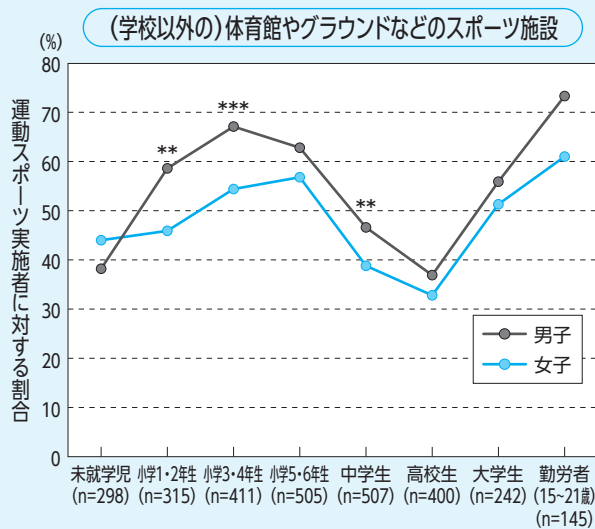
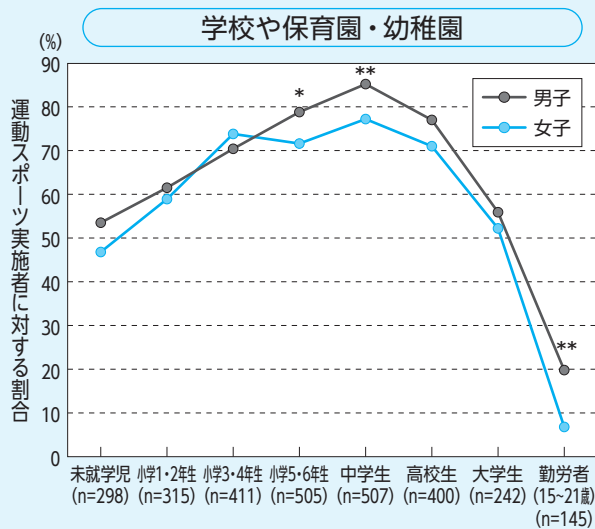
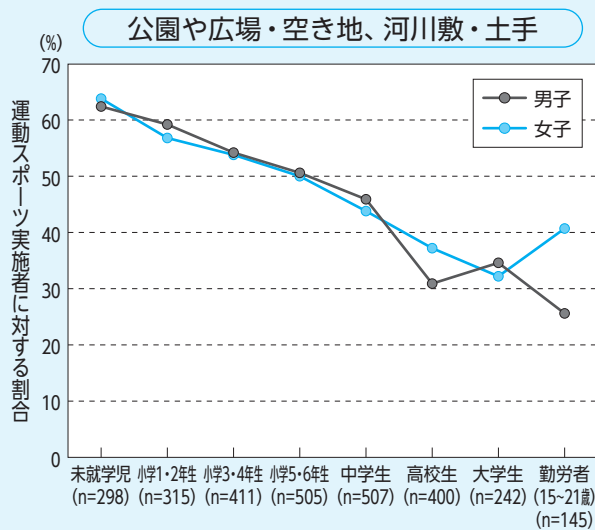
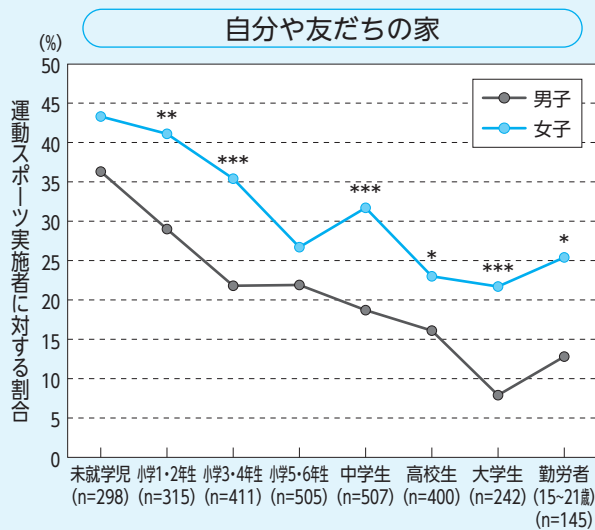
表C-2では4~11歳と12~21歳の各実施場所における上位10種目を男女別に集計した。回答数の合計は、

問3の上位5種目(複数回答)を足し合わせた延べ数である。4~11歳の「学校や保育園・幼稚園」では、男子は競技スポーツ系の種目が多く行われているが、女子はほとんどが運動あそび系の種目であり、これらは「自分や友だちの家」や「公園や広場・空き地、河川敷・土手」などの公共スペースでも行われている。「(学校以外の)スポーツ施設」では、男子は「学校や保育園・幼稚園」と同様に、競技スポーツ系の種目が多く行われているが、女子ではダンスやバレエが上位に入り、競技スポーツ系種目の実施数は男子より少ない。



【図C-3】 就学・就業状況別に見た運動・スポーツ実施場所

資料：笹川スポーツ財団「4~11歳のスポーツライフに関する調査」2017、「12~21歳のスポーツライフに関する調査」2017



【図C-4】 就学・就業状況別にみた運動・スポーツ実施場所(性別)

注) 統計処理には χ^2 検定を用いた。*: $p<0.1$ 、**: $p<0.05$ 、***: $p<0.01$

資料: 笹川スポーツ財団「4~11歳のスポーツライフに関する調査」2017、「12~21歳のスポーツライフに関する調査」2017

【表C-2】運動・スポーツ実施場所別にみた運動・スポーツ種目(性別)

男子 4～11歳	順位	自分や友だちの家		公園や広場・空き地、河川敷・土手		学校や保育園・幼稚園		(学校以外の)体育館やグラウンドなどのスポーツ施設	
		実施種目	回答数 合計333	実施種目	回答数 合計940	実施種目	回答数 合計1,176	実施種目	回答数 合計723
1	自転車あそび	56	自転車あそび	164	ドッジボール	215	水泳(スイミング)	264	
2	なわとび(長なわとびを含む)	40	おにごっこ	133	おにごっこ	196	サッカー	64	
3	おにごっこ	31	ぶらんこ	93	サッカー	165	野球	38	
4	キャッチボール	26	サッカー	86	バスケットボール	65	空手	30	
5	バドミントン	21	キャッチボール	51	鉄棒	58	スキー	24	
6	かくれんぼ	18	かくれんぼ	45	なわとび(長なわとびを含む)	53	卓球	21	
7	サッカー	16	かけっこ	44	野球	48	体操(軽い体操・ラジオ体操など)	20	
8	かけっこ	15	ドッジボール	41	ぶらんこ	40	バスケットボール	19	
9	キックボード	14	野球	38	かけっこ	36	体操競技	17	
10	筋力トレーニング	12	なわとび(長なわとびを含む)	25	かくれんぼ	34	テニス(硬式)	17	
							ドッジボール	17	
							フットサル	17	

男子 12～21歳	順位	自分や友だちの家		公園や広場・空き地、河川敷・土手		学校や保育園・幼稚園		(学校以外の)体育館やグラウンドなどのスポーツ施設	
		実施種目	回答数 合計154	実施種目	回答数 合計451	実施種目	回答数 合計929	実施種目	回答数 合計640
1	筋力トレーニング	61	サッカー	53	サッカー	130	ボウリング	68	
2	キャッチボール	12	ジョギング・ランニング	48	バスケットボール	114	卓球	60	
3	なわとび(長なわとびを含む)	10	野球	42	野球	90	水泳(スイミング)	57	
4	サッカー	8	おにごっこ	40	卓球	54	サッカー	53	
	卓球	8	キャッチボール	31	バレーボール	54	野球	44	
7	バドミントン	8	ウォーキング	24	筋力トレーニング	44	スキー	36	
	体操(軽い体操・ラジオ体操など)	7	バスケットボール	23	ソフトテニス(軟式)	43	バスケットボール	35	
	バスケットボール	7	ドッジボール	16	ジョギング・ランニング	42	バドミントン	35	
9	おにごっこ	6	バドミントン	14	ドッジボール	39	筋力トレーニング	30	
10	ドッジボール	5	ぶらんこ	14	おにごっこ	36	フットサル	30	

女子 4～11歳	順位	自分や友だちの家		公園や広場・空き地、河川敷・土手		学校や保育園・幼稚園		(学校以外の)体育館やグラウンドなどのスポーツ施設	
		実施種目	回答数 合計409	実施種目	回答数 合計803	実施種目	回答数 合計1,013	実施種目	回答数 合計524
1	なわとび(長なわとびを含む)	82	ぶらんこ	159	おにごっこ	195	水泳(スイミング)	201	
2	自転車あそび	62	おにごっこ	123	ドッジボール	149	ヒップホップダンス	28	
3	かくれんぼ	39	自転車あそび	123	鉄棒	97	スキー	23	
4	おにごっこ	34	かくれんぼ	54	ぶらんこ	87	パレエ	23	
5	バドミントン	26	鉄棒	47	なわとび(長なわとびを含む)	78	テニス(硬式)	20	
6	キックボード	22	なわとび(長なわとびを含む)	47	かくれんぼ	62	バレーボール	16	
7	かけっこ	18	かけっこ	41	かけっこ	42	体操(軽い体操・ラジオ体操など)	14	
8	トランポリン	16	バドミントン	37	水泳(スイミング)	32	キャンプ	11	
9	一輪車	11	ドッジボール	18	バスケットボール	29	ソフトテニス(軟式)	10	
	スケートボード(スケボー)	11	キックボード	16	一輪車	28	ドッジボール	10	
	鉄棒	11	キャッチボール	16					

女子 12～21歳	順位	自分や友だちの家		公園や広場・空き地、河川敷・土手		学校や保育園・幼稚園		(学校以外の)体育館やグラウンドなどのスポーツ施設	
		実施種目	回答数 合計232	実施種目	回答数 合計433	実施種目	回答数 合計723	実施種目	回答数 合計407
1	筋力トレーニング	51	ウォーキング	50	バレーボール	100	水泳(スイミング)	51	
2	バドミントン	28	ジョギング・ランニング	47	バスケットボール	73	ボウリング	39	
3	なわとび(長なわとびを含む)	25	おにごっこ	40	バドミントン	66	筋力トレーニング	24	
4	体操(軽い体操・ラジオ体操など)	20	バドミントン	38	ジョギング・ランニング	48	バドミントン	24	
5	おにごっこ	11	ぶらんこ	35	ドッジボール	47	スノーボード	23	
	卓球	11	自転車あそび	20	おにごっこ	38	スキー	22	
7	バスケットボール	10	キャッチボール	19	ソフトテニス(軟式)	36	卓球	18	
	ヒップホップダンス	10	なわとび(長なわとびを含む)	17	筋力トレーニング	33	バスケットボール	18	
9	キャッチボール	8	サイクリング	16	なわとび(長なわとびを含む)	28	ジョギング・ランニング	16	
10	かくれんぼ	6	ドッジボール	14	卓球	27	テニス(硬式)	16	
			バレーボール	14			バレーボール	16	

注) 回答数の合計は10位以下の実施種目も含む。

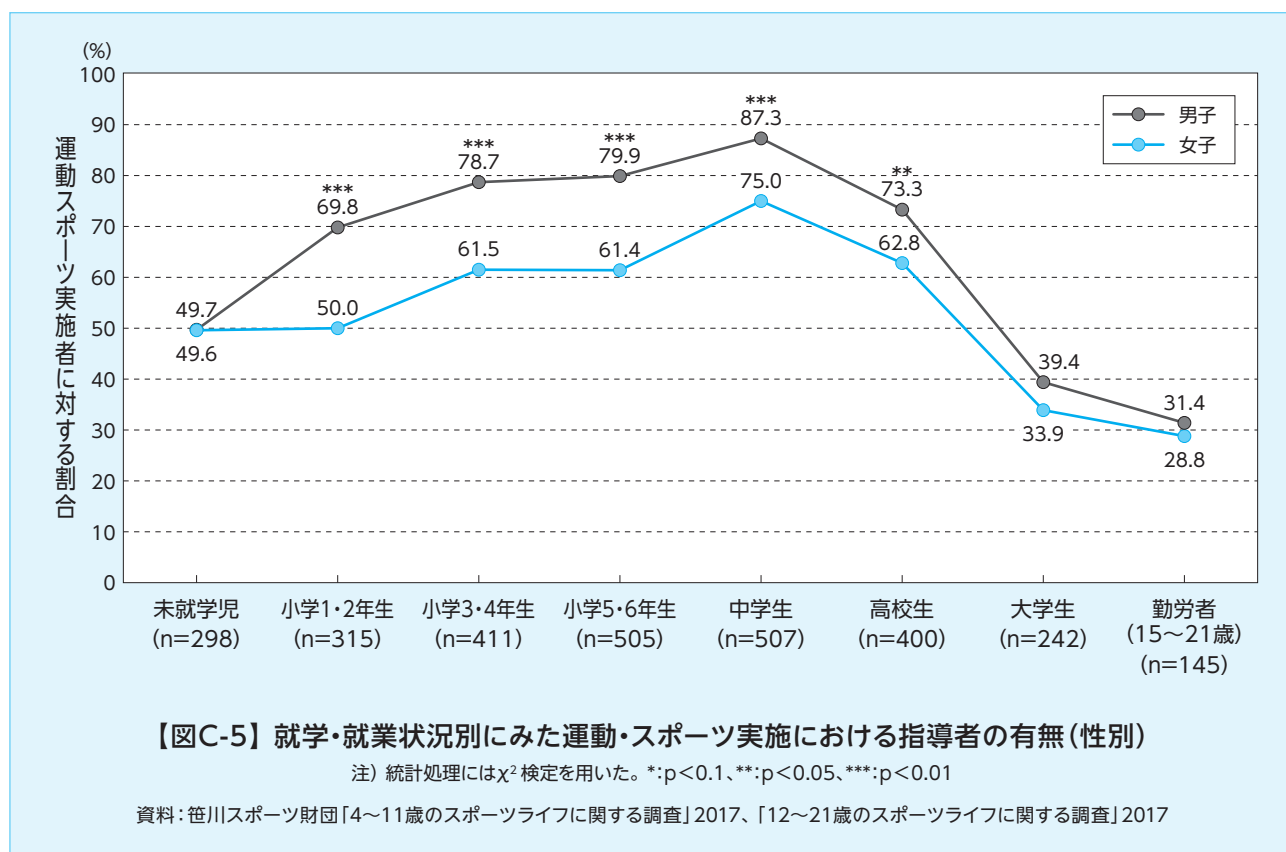
資料: 笹川スポーツ財団「4～11歳のスポーツライフに関する調査」2017、「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2017

C-3

指導者がいるか(運動・スポーツ指導者)

就学・就業状況別に運動・スポーツ実施時における指導者の有無をみると、男子では小学1・2年生から高校生までは7~8割が指導者の下で活動するのに対し、大学生と勤労者では30%台と半減する(図C-5)。また、小学生から高校生まで男子は指導者の下で運動・スポーツ

を行っている割合が高い。指導者の有無について性差が著しく認められる男子は、小学生の低学年からスポーツ少年団やスポーツクラブに加入し、中学・高校での運動部活動参加率も高いことから、組織的なスポーツに参加していると考えられる。



C-4

まとめ ~運動・スポーツ環境の運動部活動による切断とジェンダー~

以上のように、子ども・青少年の運動・スポーツ環境について、4歳から21歳までの幅広い就学・就業世代を対象に統計的にみたところ、次の2つの現状と課題を確認できる。

ひとつめは、中学・高校での運動部活動は、同伴者や場所、指導者といった運動・スポーツ環境に大きな影響を与えているのと同時に、長期的にみると個人の運動・スポーツ環境に画一化と非連続性をもたらしている。運動部活動では常に一定の人数が確保される仲間(学校

の同級生)といった、運動・スポーツ環境が保障されていて、参加率も非常に高い。

しかし、それらは卒業とともにすべて失われる。運動部活動はわが国の子どもの高い運動・スポーツ実施率を支えるシステムであるが、個人の長期的なスポーツライフ、あるいは生涯スポーツの観点からみたとき、運動部活動によってコミュニティや場所、指導者といった、運動・スポーツ活動を支える社会環境に非連続性が生じているといえる。たとえば、ラグビーやアメリカンフットボールの

ような、中学・高校の運動部が少ない種目の場合、小学生を対象にタッチラグビーやフラッグフットボールの普及を図っても、中学・高校では必ずしも当該の部活動が確保されず、別の種目の運動部を選択せざるを得ない。そこで競技歴は切断され、大学や社会人での普及や強化が妨げられることになる。運動部活動については教員の過剰負担や少子化など課題が多いが、人々の長期的なライフサイクルからみた社会的文脈での連続性や、競技普及の観点から考え直す時期である。運動部活動が与える個人の長期的なスポーツライフへの影響については、今後検討していく必要があるといえるだろう。

ふたつめは、性差の拡大を促すであろう運動・スポーツ環境についてである。これまでのスポーツライフに関する調査でも、子どもの運動・スポーツ実施に8歳ころから性差がみられ（笹川スポーツ財団，2010；工藤・海老原，2010）、小学校高学年以降、男子が組織的な競技スポーツへの参加が進展するが、他方で女子にはその傾向が欠損し、運動あそびにとどまる。このスポーツ参加の現状は、中学・高校の運動部活動中心の運動・スポーツ環境下では、女子の運動・スポーツ参加にとって不利な要因であると考えられた（笹川スポーツ財団，2012；工藤・海老原，2010）。しかしこれは少し短期的な、また競技スポーツの観点に偏りすぎた見方かもしれない。

一方で、今回のように4歳から21歳までの幅広い就学・就業世代にわたって子ども・青少年の運動・スポーツ環境を統計的に分析し、さらに成人のスポーツライフに関する調査を対照すると、従来とは異なる推論を導き出せる。たとえば、20歳以上における週1回以上の運動スポーツ実施率は男性が54.9%に対して女性が56.6%であり、特に30歳代では男性が49.4%に対して女性が54.9%、40歳代では男性49.3%、女性54.6%、50歳代

では男性47.9%、女性53.0%となっている（笹川スポーツ財団，2016）。その多くがウォーキングや軽体操といったエクササイズであり、自宅や公園・道路などの公共スペースで行われている（笹川スポーツ財団，2010，2012）。これは、子どもから青少年期の女子の上位にランクインする実施種目（ダンスや体操）や環境（友だちや家族、家や公園、指導者なし）とも共通性が高い。すなわち生涯スポーツの観点からみると、運動部活動への参加率が低く、組織的な競技スポーツに偏りすぎていない女子のスポーツ実施状況は、運動部活動による運動・スポーツ環境の非連続性の影響を男子よりは受けないのではないかと考えられる。

子どもから少年期にかけて、組織的な運動・スポーツ参加では男子の方が優勢であるものの、成人後の運動・スポーツ実施ではその差がなくなる、もしくは女性の方が実施率は高くなる現状をみると、子ども・青少年期の運動・スポーツ環境について、生涯スポーツの観点から考える重要性を指摘できる。

最後に、「無職」の青少年の運動・スポーツ環境の傾向として、たとえば友だちやクラブ・サークルの仲間と実施する割合が低い、学校や学校以外の運動・スポーツ施設利用が少なく、家や公共スペースが多い、といった実態は留意すべき視点であり、今後このような層の子どもたちについて注視する必要があると思われる。また、運動部活動に参加する機会のない15歳から21歳の「勤労者」の運動・スポーツ環境として、同世代の高校生や大学生の運動・スポーツ実施状況との比較、およびその後の運動・スポーツ実施と環境などについての詳細なアプローチこそ重要である。これらのデータは、ポスト運動部活動における子ども・青少年の運動・スポーツ環境について考えるための参考になるかもしれない。

<参考文献>

工藤保子・海老原修（2010）男女の運動・スポーツ格差を探る—SSF子ども・青少年のスポーツライフ・データ2010から—，日本体育学会第61回大会 体育社会学専門分科会発表論文集，pp30-34

笹川スポーツ財団（2010）子どものスポーツライフデータ2010—4～9歳のスポーツライフに関する調査報告書—，pp48-51

笹川スポーツ財団（2012）青少年のスポーツライフデータ2012—10代のスポーツライフに関する調査報告書—，p39

笹川スポーツ財団（2010）スポーツライフデータ2010—スポーツライフに関する調査報告書—，pp32-35

笹川スポーツ財団（2012）スポーツライフデータ2012—スポーツライフに関する調査報告書—，pp34-40

笹川スポーツ財団（2016）スポーツライフデータ2016—スポーツライフに関する調査報告書—，pp19-20